

旅にしあれば・私の不易流行

川上明日夫

月日は百代の過客にして、行きかふ年も又旅人なり。船の上
に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者は、
日々旅にして、旅を栖とす。古人も多く旅に死せるあり。

『おくのほそ道』 芭蕉

とであった。今に思う。

*日本現代詩大会イン神戸（1999）の会場で詩人の長谷川龍
生氏や日高てる氏に会った。はじめてであった。それに四国
の片岡文雄氏にもそこでお会いした。詩集『流れる家』の詩
人である。安水稔和さんからの紹介もあり北陸の詩人として

詩の朗読を依頼されたことを忘れない。北陸から一歩外の世
界へ踏みだした、そんな貴重な経験になる詩人の大会であつ
た。朗読詩は「白雨」であった。

*文学学校では2000年から日高てる氏のサブチューターを、
その二年後には本校の講師を務めるに至った。考えてみれば
私の詩的人生の大切な時期をこの文学学校で過ごしたことに
なる。とても貴重な経験であった。2001年に土曜美術社出
版販売の企画でシリーズ現代詩の10人に推薦され、『アンソ
ロジー川上明日夫』詩集の出版に至った。今もって 美しい
豪華な選詩集である。詩集とはこうあるべきだとの贅沢さが
「凜」としかし懐かしい親しさで感じられ、とても豊穣なこ

*2005年に詩集『夕陽魂』を思潮社から出版した。この
詩集で第16回『富田碎花賞』を受賞したこともとても幸運で
あった。表彰式の会場に汗をふきふき花束を抱えて飛び込ん
でみえた文学学校の小原政幸事務局長の姿が忘れられない。
嬉しく親しい感謝の心の記憶である。暑い日であった。光る
汗を見た。

秘すれば花なり 秘せずば花なるべからず

『風姿花伝』 世阿弥

*文校での詩の講座は、恥ずかしいくらいに傲慢であった。
解説や解釈のむこうに湧く自身の想像力に酔った。創造的で
独断的な解釈、かさなる風景のそれをこそ、見えるものの向
こうに見えないもののそれを見て尋ねる、詩精神を伴う想像
力（創造力）であった。言葉の「間」のそれがあつた。モチ
ーフは、常に二重三重のイメージと意味をだぶらせる、の、
それを湧かせており、その飛躍にこそ「詩」はあつた、と。
ヴァレリーの「詩は歩行の精神で散文は舞踏の精神である」
のそれである。そんな話しぶりであつたな。むろん自身の詩
論をもそこに重ねて、自身にも語っていたことは忘れない。

心地いい疲労でもあった。な。我ながら文校生を前に、詩の「話」には常にそんな羞恥が伴っていて、文学を志す人への講話、講義にもならない何とも言えない烏滸（おこが）まじさに包まれていたな、内心忸怩たる思いが、常にそこにあったことを忘れない。

*2005年に詩集『雨師』を思潮社から出版した。この詩集で第47回日本詩人クラブ賞候補になった。また第10回小野十三郎賞の候補にもなった。心地よい疲労であった。

*2012年、この年を忘れない。日本の今日の代表的な詩人が入るとされる思潮社『現代詩文庫』に推挙されたのだ。戦後詩人たちの名列の中にそれを見た。嬉しかった。全国の見えない詩人たちが「選ばれてある」を目指して励んでいるその詩文庫に、である。口にできない自負。沁みる思いが溢れた。文庫の帯コピーがとても面映ゆかった。「今日の代表的詩人を網羅し 時代の言葉の能性を最も遠くまで展望した最大かつ最高度の詩集シリーズ」そう銘うたれていた。この言葉に洗われて、いつだってそれは、心の道標となった。見えない、ゆるぎない自負である。「詩は志である」を生きて来たな、好かった、の、感慨が深い。地方で詩を書いている詩人の運命にも光は充てられる。「詩的真實」のそれにしみじみ酔った。

*文学学校での春、夏、秋、冬、四季は静かに巡っていた。人生も文学も。それらを学ぶ人達と共に私も学んでいたのがある。「詩は経験である」を一緒に。講座、終了後の肝胆相照

らす飲食は楽しい。もはや交わす言葉以上に文学への鷹揚な許しの希望がそこに実っていた。分け隔てなく、友へと誘う学びの思いがみち溢れていた。表現という心の不思議へのそれをこそとても拓いてくれた。会話が実った。言葉に乗せていかに美味しいかの、その比喩に向きあった。その団樂の意味を開いてくれた。互いのである。文学の実作を通してその共犯意識を体感した、その実経験という実りがあった。互いに和する話として開かれるのであった。語り叱責しいそして絡みあい、許すことで解けてゆくほどにである。「詩は言葉の技術である」。この飲食中の談論風発と詩論のそれをこそが、また文学の姿の開かれた作業の一瞬と永遠の場所のようでもあったのである。作品を互いに開示してこそのものである、胸襟を開いてこそその談論、そこにこそ文学が見えた。風が湧いていた。「風は言葉では語れない事を巡る経験である」の箴言。眠い疲労の底の話し、それを、垣間聴いていた。

*文学学校付近は大阪城の外豪堀付近にあたる空堀商店街を背にした桃園公園の脇に、ひっそり「直木賞」の直木三十五の文学記念館がある。木造りの簡素さが忘れられない佇まいであった。賑やかな名残の商店街の裏通りのひっそりした溜息。そんな静かな辺に湧いていたな。夜ともなれば赤い火影がさそう暗闇へと尋ね歩くのである。つかのまの一時の言の葉の座談。文学学校は地下鉄の谷町四丁目、通称「谷4」でおいて地上へと。空への眺めに一息ついて10分も歩けばいい。この町の裏路地にはいい飲み屋があったな。昭和の風情を

残して。魚屋・八百屋・雑貨店・喫茶店・一杯飲み屋・焼き鳥屋・中華料理店等々と、いろいろあわせ持つてこつた者という大衆文化、大阪文化の象徴のように。それがまた一瞬のときめきと永遠の忘却をも息づいていて。それを感じるに不足ない賑い。人々の暖かい想いが通う下町のそんな名残のある夜昼の風情、懐かしい心を沸かす通り道だった。いつだって暗闇は人を誘って不思議を止まない。

遊びをせんとや生まれけむ、戯れせんとや生まれけん、遊ぶ子供の声きけば我が身さへこそ揺るがるれ。

『梁塵秘抄』

*文学学校での「夏期合宿」のそれは、それこそが心誘う微風のようにある景色という、忘れられない思い出。その一つが滋賀県安土市のユースホステルでの合宿。目の前にあった琵琶湖疎水の水が朝にはきらきらと綺麗であった。茫然と水を思った。朝の講義に入る前の束の間のスナップである。長谷川龍生をかこんで、榎野博（万年青一）・岩代チユター・富上チユター・川上明日夫等の茫然とした疲れた様子、夕べのまだ名残のある風情だ。独特の長谷川龍生節にすっかり酔酌して、である。学生委員会の主催になるこの会はとてもいい。自主運営で心に残っている。文校の信貴山の合宿にもお供した。この小さな山の周辺の眺めは私の心の記憶の名残であった。高野山が遠く目に霞んで見えた。合宿は常に新鮮であったな。心を入れ替え育む仕組みと試み、工夫が常にそこ

には気遣われてあった。一篇の作品にみる表現の工夫と相違に。合宿もまた一篇の作品である。そこでこそその見えないもの、の、それを湧かせてこそが文学ではなかったろうかと。ただ過ぎに過ぐるもの帆かけたる舟。人の齡。春・夏・

秋・冬。

清少納言

*詩集『往還草』（思潮社）で第6回「更科源蔵文学賞」を受賞したのは2013年。北海道の北の果て弟子屈町で創られた「文学賞」である。更科源蔵はこの地でアイヌの民俗文化の研究に一生を、また尾崎喜八の知遇を得て、伊藤整、真壁仁等と親交を、詩人として出発。弟子屈の教育文化に、北海道の道民文化にと大いに貢献。日本現代詩人会から（先達詩人への敬意）をおくられた詩人として、顕彰を受ける。それを讃えて「ふる里」が設けた文学賞であった。町民挙げての暖かいおもてなしの授賞式を忘れない。

*2017年、「地域文化功労 文部科学大臣表彰」を授与さる。
*2021年、詩集『肴のきもち』（山吹文庫）が「日本詩歌句随筆評論大賞 特別賞」を受賞。

ゆく河の流れは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。
よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつ結びて久しく、
とどまりたる例なし。

『方丈記』

鴨 長明

私の表現のホームグラウンドは、詩精神は、常に「大阪文学学校」と共にあったことを忘れない。